
東方騒動劇

霧夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方騒動劇

【Nコード】

N6661Y

【作者名】

霧夜

【あらすじ】

ある日、ビルから飛び降り自ら命を絶とうとした主人公新月零だがそれはかなわず過去の東方の世界に飛ばされてします。そこで出会うAH-64アパッチ（擬人化）と出会い。二人で旅をいたしていくお話。たまにはほのぼの書きたいという作者の思いにより生まれた小説です。

まさかの幻想入り（前書き）

今回からどんだんほのぼのにできるよつに頑張っていきます。

まさかの幻想入り

「ここは、どこだ？なぜ俺はここにいるんだ？」

そう言っているのは14歳くらいの少年である。

「俺は、確か・・・ビルの屋上から飛び降りて死んだはずだが・・・？」

そう言っただけで腕を組もうとすると、フワッとする物に指が触れた。

「ん？なんだ・・・なんじゃこりゃー！！」

その触れた物を引っ張って見てみるとそれは、猫の尻尾だった。しかも、後々確認してみると二本ある。

・・・数刻後・・・

「よし、一回状況を整理してみよう。」

まず、飛び降りたはずが死んでいない。自分に猫の尻尾と耳がある。意味不明。

「これは、あれですか？よく二次創作的な物にあるゲームの世界に入ってしまったとかのそういうことですか！？」

とりあえず、叫ぶ。はたから見れば「うわ、なにこいつ」とか思われるかも知れないけど現状が理解できないから仕方ない。

「とりあえず、そこらへん歩いてみれば街に出られるだろう。」

そう言っただけで不安ながらも人のいる場所を探すべく歩き始めた。

・・・数刻後・・・

「おかしいだろ・・・。」

そう呟いてしまってもおかしくないだろう。なぜなら、いくら歩いてもあるのは森ばかりである。人なんかと出くわすこともなければ

ば、人の住む場所すらない。

「……。まあ、あんまり疲れないし腹もへらないからこのまま歩きつづければ何とかなるだろう。」

そう自分を励ましながら歩きつづける。

……半刻後……

「あれは……神社か？どこかで見たことがあるような……。目の前にあるのは神社であろう。そして、見覚えがあるようだ。」

「とりあえず、上ってみるか。」

そう言つと鳥居につながる祭壇を上つていく。

……

「やっぱりここは、見たことがあるぞ。確か、諏訪大社？」

「その通り。ここは、諏訪大社さ。ところで、あんたは、何しに来たんだい？妖怪風情が。」

「……は？」

(なんだ、この少女。俺の事を妖怪とか言いやがったぞ。てか、見覚えがあるような……！……まさか！東方の洩矢諏訪子では？よし、聞いてみよう。)

「失礼ですが。まさかあなたは、洩矢神では？」

「まあ、そうだけど……。あんたは？」

「失礼しました。俺は、新月零しんげつれいといいます。」

とりあえず、敬語を使っている零であった。

「で、どうしてここに来たんだい？」

「えっと、なんというかですね……」

……少年説明中……

「なるほど……偽りはなさそうだね。ところであんた能力は？」

「能力ですか？」

「うん。目を瞑って思い浮かべてみな。」

「・・・はい。」

目を瞑って思い浮かべてみる。・・・これか？・・・『身体能力を爆発的に向上させる程度の能力』

「どうやら俺の能力は『身体能力を爆発的に向上させる程度の能力』らしいです。」

「まあ、猫又のあなたにはお似合いだろうな。」

「はあ」

(マジか！猫又！橙と同じじゃないか！！やった！)

「・・・。ところで、あなたは行く当てがないんだろ。しばらくここにいといい。」

「え！・・・いいのですか？」

「ああ、理由が理由だしさ。・・・それに悪い事するようなやつとも思えないし。」

「ありがとうございます。」

・・・とある山の中・・・

とある山の森の中にA H - 6 4 アパッチが密かに表れていたのだった。

まさかの幻想入り（後書き）

ほのぼの要素がなかったWWWご指摘などありましたらどんどんお
よせください。

諏訪子様のしゃべり方これでいいのかな？

擬人化されたアパッチを見つけた。ヤバイ勝てるかな？（前書き）

はい。擬人化アパッチは作者オリジナルです。え、なぜこんなことを？だって擬人化大好きなんだもんw投稿は金曜日と土曜日です（ほかの小説もだけどw）。

擬人化されたアパッチを見つけた。ヤバイ勝てるかな？

・・・諏訪大社・・・

「じゃ、見回り行ってきます。」

「あ、今日は私も行くとするよ。」

俺がそういうと、案の定諏訪子もついてくると言ってきた。今日は、この諏訪大社がある山を見回りと偽った暇つぶし&修行に行くのだ。

・・・とある山の中・・・

そこにあつたA H - 64アパッチが突如として光を発した。光が収まるとそこには一人の少女が立っていた。

「あ・・・あれ？・・・ここどこ？・・・というか・・・戦場に放置された！？や、ヤバイ！敵にやられる〜！！」

なぜか自分のいる場所を戦場と間違えしかもパニくるアパッチである。

「・・・あれ？何でしゃべれるんだろう？しかも、人間みたいに手や足があるな。あれ〜？」

頬に手を当て首を傾げながら考える。ちなみに服装は、軍用のベレー帽（？）、迷彩柄の半袖（日本の国旗入り）、迷彩柄の短パン（日本の国旗入り）、指が出ている軍用の手袋、ブーツ、背中に一口ター、片目にスカウター、スカーフといういでたちである。

「それよりも、ここはどこですか〜！！」

・零&諏訪子・

「本当に自然が豊かだな。」

「だろっ？ここは、自然が『ここは、どこですか〜！』」・・・
ん？」

諏訪子の目が見事点になっている。もちろん俺もだが。

「なんだ？」

「あっちの方だね。」

・・・数秒後・・・

「あれ誰だろっ？」

「・・・さあ？」

「話しかけてみなよ？」

「はいはい。」

諏訪子にそういわれ、しづしづながら話しかけに行く俺。

「あ〜。」

「（ビク）・・・え、えっと・・・どちら様ですか？」

なんか、偉くビビりな少女です。

「失礼。俺は、新月零というが・・・あなたは？」

「え、えっと。私は・・・人間からAH-64アパッチと呼ばれて
いたであります。」

まさかの軍隊なまりが出ました。

「AH-64という・・・戦闘ヘリですか？」

「え、は、はい。」

「・・・。どういうことだい？新月？」

「つまりですね。彼女は、俺と同じく未来から来てしまった兵器
です。」

「へ、兵器？」

「えっと・・・。」

・・・少年説明中・・・

「なるほど……。」

「あの……。」一つ聞いてもいいでありますか？」

「あ、はい。どうぞ。」

「えっとでは、ここはどこですか？」

「（やっぱそう来ますよね）」

……少年説明中……

「？」

やはり、元兵器のアパッチには理解できなかったようで首を傾げている。漫画とかなら頭に？がついているだろう。

「まあ、そんな事よりちようどいいから二人で戦ってみたら？」

「……ハ？」

「私、戦うの嫌いなんですありますが……。」

「ハ？」

最初は、諏訪子のとんでも発言に突っ込みを入れたが、そのあとのアパッチの発言にはもつと驚いて二人で言ってしまった。

「だって、自分の攻撃で人を死に追いやるのヤダじゃないですか。」

「お前本当にアパッチか？」

……数刻後……

「あ〜う〜。分かりました。ちょっとだけですよ……。」

「ああ、頼む。」

あの後交渉の末ようやくこの状況になった。

「じゃあ、どっちかが降伏するまでだよ。スタート！」

諏訪子がそういうと同時に俺は空に浮かび上がる。アパッチは背中の中のローターを回し、離陸態勢に入る。少しして上がってきた。

「先手必勝！喰らえ！」

そう言っただけは、弾幕を放つ。もちろん諏訪子に教えてもらったものだ。しかし、さすがアパッチである。機動性を生かしてすべて避けてしまう。そして、一番気になるのは、手に握られている銃だ。

「ま、まさか！M230機関砲！？」

「そのとおりです！喰らえ〜！」

そう言っただけは、M230機関砲を撃ちまくってくる。（

なお、弾丸はゴム弾）

「あぶね！」

そう言いながらかわすが弾丸は、次々と発射され俺にあわせて銃口を傾ける。しかも、正確に。

「お前！絶対なんか能力持ってるだろ！」

「能力？『レーダーであらゆる物の位置を把握する程度の能力』
というやつでありますか？」

「それだー！」

その会話をする間にも弾丸は次々と発射されてくる。そして、ついに零には朗報の事が起こった。

「カス・・・」

そう。弾切れだ。

「な！弾切れでありますか？」

「それを待ってたぜ！おりゃ！」

そう言っただけは弾幕を放つ。

「っ！ヤバイですね。こうなったらこれを使っただけです。」

そう言っただけは腕に握られているのは

「ヘルファイヤーミサイル！！」

そう、空対地ミサイルであるヘルファイヤーミサイルだ。空対地ミサイルとして運が良ければ空を飛んでいる機体にすら当てることが不可能ではない。

「それ！」

アパッチから二発ヘルファイヤーミサイルが放たれる。

「くそ！」

何とか、二発を避けた零。間一髪であった。

「危なかった。だが、これで終わりだ！」

そう言つて弾幕を放つた。一発がアパッチの顔面にクリーンヒットした。

「あ……やべーやつちまった。……大丈夫か……。……!？」

零は驚いた。何しろ零の弾幕は小さいのでも一発当たれば弱小妖怪を葬り去れる威力があるのに大型の妖力弾が当たった顔面は無傷では済まないはずなのにアパッチの顔面には傷一つついていないのだ。

「え？えつと……大丈夫でありますか？」

「さすが、元戦闘ヘリ防御力半端じゃねー！」

「はいはい。そこまで。このままじゃ終わらなそうだからここは引き分けね。」

「まあ、それでいいか。」

「私としては早く戦いを切り上げたかったのでちょうどよかったであります。」

こうして、二人の戦いは引き分けということで幕を閉じた。

「ところで、アパッチはこれからどうするんだ？」

「私でありますか？……うん。」

唸りながら腕を組んで首を傾げて考え出すアパッチ。なんか、行動がいちいち狙つてやつてるとしか思えない。

「当てがないならうちにくるか？」

「え！いいのでありますか！」

「あ、ああ構わないよ。」

「ありがとうございます。」

こうして、アパッチが諏訪大社と一緒に暮らすことになったのである。

擬人化されたアパッチを見つけた。ヤバイ勝てるかな？（後書き）

作者

「なあ、零それにアパッチ。」

零

「なんだ？」

アパッチ

「何でありましょう？」

作者

「この後書きで行う企画に参加してくれないか？」

零

「いいけど」

アパッチ

「戦いとかナシならいいでありますよ。」

作者

「ありがとう！我がオリキャラたちよー！（ニヤ）」

零

「内容にもよるがな。」

作者

「次回をお楽しみに」

オリキャラ紹介(前書き)

オリキャラの紹介となっております。

オリキャラ紹介

一人目

名前：新月しんげつ 零れい

種族：妖獣 猫又

身長：170cmくらい

年齢：15歳

東方の世界にくる前の住んでいた場所：2020年の東京

武器：刀

能力：身体能力を爆発的に向上させる程度の能力

好きなことなど：運動、辛い物、優しい人

嫌いなことなど：読書、苦い物、自己中人

能力解説：爆発的に身体能力を高める事ができる能力。

キャラ解説：普段はおとなしい性格である。怒らせなければ問題はない。東方にも軍事にも知識を持っている主人公。猫又になっているのはノリ。一人称は俺。

二人目

名前：AH-64 アパッチ（後に風舞かせまい アパッチに改名）

種族：物が妖怪化したもの

身長：150cmくらい

年齢：元2、見た目14歳くらい

東方の世界にくる前に住んでいた場所：1040年自衛軍帝都東

京駐屯地

武器：M230機関砲、ヘルファイヤーミサイル

能力：リーダーであらゆる物の位置を把握する程度の能力

好きなことなど：空を飛ぶこと、人を守ること、甘い物、責任感

のある人

嫌いなことなど：戦うこと、人を殺めること、対空ミサイル、対空砲、自分勝手な人、チビと言われること、貧乳と言われること

能力解説：背中にあるアパッチの独特のローターについているローターでありとあらゆる物の位置が把握できる能力。

キャラ解説：本人いわく人に使われてやられるよりマシになったとの事。服装は、軍用のベレー帽（？）、日本の国旗のついた迷彩柄の半袖、半ズボン、指の部分がない軍用の手袋、片目にスカウター、スカーフをつけている。背中にあるローターでヘリ同様に飛ぶことができる。チビや、貧乳にコンプレックスを持っており、その話題を出した瞬間ヘルファイヤーミサイルを放ってくる。基本は、自衛軍で使われて事からとても平和主義。防御面でも最強を誇る。

オリキャラ紹介（後書き）

作者「では、お二人がたどうぞ」

零&アパッチ「祝第一回東方ラジオ〜！」

作者「よし〜！」

零「引き受けるんじゃないかった・・・。」

アパッチ「まあ、まあ、いいじゃないですか。」

作者「このコーナーでは、この小説に何か質問がある読者からの質問に真っ向から答えて行ってもらおうコーナーだ！この、小説を見てくださっている読者の方々、ぜひご応募ください！」

零「では、一枚目」

二人とも頑張ってるかい？さて、質問なんだけどアパッチのいた時代には何が起きているんだい？ぜひ聞かせてほしいものだよ。

- 諏訪 -

零「では、アパッチさんお願いします。」

アパッチ「そうですね。私のいた時代は、アジア等各地はアメリカ合衆国の力が弱まったことにより各地で戦争が勃発して日本もいつでも戦えるように自衛隊を自衛軍に直している時代でしたね。私達、AH-64アパッチは、時代遅れということで倉庫の中にいたんですけどね。」

零「ということですよ。」

作者「では、今日はこの辺で〜！ご視聴ありがとうございました！」

大和の国からの使者（前書き）

まず、最初に謝っておきます。ごめんなさい。今回は僕の勝手な展開が含まれます。（使者とか）苦手な方はバックをおすすめいたします。

大和の国からの使者

・・・諏訪大社・・・

「今日も平和だね。」

「平和だね。」

そんなことを言いながら本殿の中でお茶を飲んでいるのはこの小説の主人公新月零と、この神社の祭神である洩矢諏訪子である。アパッチは、外で巫女さんから掃除の仕方を教えてもらっている。理由は、『私も女子としてこの世にいる以上家事位はできるようになる』とあります。『・・・だそうだ。』

「『あります。』の使い方間違っていると思うんだが。」
と零から突込みが出たのは余談である。

「すいませ〜ん！」

いきなり声がした。

「あれは・・・巫女かな？・・・巫女がこの神社に何の用だい？」
少し威厳を込めて言っているのだろう。零にまでその神力が伝わってくる。

「えっと・・・洩矢諏訪子様ですか？」

「私がそくだよ。・・・何の用だい？」

「えっと、加奈子様より文を預かって参りました。」

（加奈子・・・？・・・っ！まさかあの八坂加奈子か！？）

「やっぱりかい？・・・そろそろ来るとは思ってたんだよ。どうせ、戦にかかわることだろう？」

「・・・私は、文をお預かりしてきた次第ですのよ。」

巫女さんにつこり笑いながら言つと微妙に怖い。

・・・数刻後・・・

本殿の中には、零、諏訪子、アパッチ、諏訪大社の巫女さんの四人が円を組むように座っている。なぜなら、内容が

「諏訪の神洩矢諏訪子

我が大和の国は、信仰を得るためにそちらに攻め込もうと考えている。我が大和の国とお前の国が戦ったらまず、お前に勝利は無かるう。そこで、交渉の場を設けようと考えている。今日から三日後までに使者をよこせ。

大和の国神代表 八坂加奈子

「使者か……。」

「いったい、どうするかね。」

「とか、悩むふりしてこっち向くな。」

「あ〜う〜」

「（か、可愛い）」 *アパッチ

「諏訪子様……いかがいたします？」

「ここは……零とアパッチ行ってくれるかい？」

「どうしてこうなった？」

「私は行つてられないし……巫女も無理だし。ミジャクジなんか行かせたら向こうを怒らせるだけだし。」

「……ハア、分かったよ行けばいいんだろ？」

「そういうこと（ニコ）」

こうして、使者として零とアパッチが行くことになった。

大和の国からの使者（後書き）

今回短くてすいませんorz

次回は、二人に旅立ってもらおうと思います。

追伸、アパッチの軍隊なまりの口調は巫女さんの頑張により消えま
した。

零&アパッチ「第二回東方ラジオ〜！」

アパッチ「殺つて参りました。第二回東方ラジオです。」

零「アパッチ、字が違う。」

アパッチ「それはどうでもいいとしてですね。さっそくはがきを呼
んでいきますよ！」

零「ほいほい。」

アパッチ「では一枚目」

あ、あの諏訪子様が出したようなので私も出しました。質問で、
アパッチさんの背中の中の羽？の風力はどのくらいですか？境内の掃除
を一瞬で終わらせられるくらいですか？

諏訪大社の名もな

き巫女

零「では、アパッチ、答えを。」

アパッチ「私の背中にあるのはローターまあ、回転翼の事だね。人
間2人乗っても浮くからすごい力だよ。本来そういう目的の物じゃ
ないし、たぶん違うゴミが散らかると思います。」

零「だそうですよ。」

アパッチ「では一枚目・・・作者からですね。」

零「無視した方がいい予感が・・・。」

アパッチに言ってもらいたい事がある。「私はバカだ〜！」だ

作者

アパッチ「あの、作者！調子に乗ってますね。」

零「言わなくていいぞ。作者の事だし。」

アパッチ「そうですね。あら、時間が来てしまいました。」

零「では、また次回お会いしましょう。」

アパッチ「また逢う日までしばしの別れ！」

零「それどこで覚えたし。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6661y/>

東方騒動劇

2011年11月26日00時54分発行